

昨年3月頃、北海道大学名誉教授・

富田房男先生から日本よりもっと現場でのバイオが進んでいるフィリピンに、ゴールデンライスを見に行きましょうとお誘いを受けた。12月に日程が決まり、南幌町から生産者である大館昭昭さん、岩見沢からは馬場広之さんと私の3名が2月1〜4日までの日程で各地を回った。

成田からたった4時間、時計の針が23時を回るくらいにニノイ・アキノ国際空港に無事到着した。一番左の空いている入国審査では、明らかに口だけは達者に動く異常な数の牛タン戦術の車イス軍団が優先して通り抜けているのを眺めながら、われわれは正々堂々と入国スタンプのために、1時間ほど牛歩戦術させられたのは歓迎の挨拶代わりだと納得することにした。

ターミナル内でセント・トーマス大学の先生との待ち合わせの場所が分からず、30分ほど迷子になり、その後ホテルに到着。ガードマンは、かなり使い古したであろうショットガンを持ち、われわれ北海道のアーバン・カントリーヒック、早い話が洗練された田舎者に満面の笑みを浮かべ、入口のドアのロックを外してチェックインした。これから始まる3日間の緊張感と期待を十分認識できる初日のスタートであった。

ホテルの朝食は30年前に20歳だったであろうウエイトレスが注文を取りに来たので、心づけをテーブルに置いて席を離れようとする

と、富田先生から「大変なことになるよ」と言われたが、その意味を理解するのに3秒もかからなかった。周りで同じく朝食を取っている地元の人たちが私たちを見て、目を丸くしているのだ。その視線は私たちではなくジョージ・ワシントンの1ドル札に……。どうもお金の価値が違うようです。イングリッシュが通じるのは知っていたし、使用する通貨もUSDでもOKだと安易に考えていたので、成田では現地の通貨ペソに両替をしないで、かの国ならぬ、比の国にやってきたのだ。

今回、私たちの世話係をしていたいただいたのは富田先生が教べんを取られているセント・トーマス大学の先生方で、以前、北海道大学・農学部留学時代の教え子なのだから、これからのバイオ北海道農業に少しでもお役にたつのであれば、光栄この上

バイオ農業先達国、フィリピンに行きましょう！

Vol.52



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

ないことである。

ではあるが、早朝からフィリピン農務省、あの緑の革命を成し遂げたIRRI（国際稲研究所）、組み換えの関連施設、研究所、承認機関を立て続けに歴訪するツアーを敢行することになり、アーバン・カントリーヒックには多少、荷が重い感じは否めなかった。それぞれの機関ではフィリピンの組み換え作物の承認関係の仕組み、特定除草剤耐性、

オレにも 言わせる！

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

Bt（特定害虫抵抗性）の利点や組み換えの仕組みを拝聴することになったのだが……。

Btの有用性

フィリピンではナスをよく食べる。この20年間で10万tから22万tへと飛躍的に生産量は伸びているが、生産者にはかなりの負担を与えていることを消費者はどのくらい知っているのか、疑問に感じる場面に出くわすことになる。

普通の栽培だと1週間に2回、多いときには3回の殺虫剤を散布するが、Bt導入で特定の害虫をコントロールできる。結果的に30〜50%程度、殺虫剤を減少することができる。

日いつる国のブランド高原野菜ではこのような農薬散布は簡単な作業工程の一つなのだろう。しかしマトモな自走式農薬専用機械など見かけず、背負い動噴で散布作業を行なうこともある比の国では、農薬そのものが健康被害製造業になるのかもしれないのだから、Bt導入は農業の救世主となるだろう。

ちよつと調べてみた。

フィリピンの平均経営面積は2haで、現在の日本のそれと比較しても大差はない。フィリピンで出来るGMが、なぜこの日本で出来ないのだろうか？ もしかして日本では背負

い動噴なんて存在しない、だって小農も大農も豊かな農政のおかげで乗用式の散布機が当たり前だから？

多くの日本の生産者はこのBtを含むGMに肯定的な意見を持ち合わせていない。本来であれば安全・安心は国家が担保すべきことである。あれこれと考える必要がない無知で無垢な消費者が無用の混乱だけを作る**発言力のみを主張するのは、正しい米国民民主主義をどこの時点で歪めさせたこの国の主犯者は誰なのか興味があるところだ。**

生産者自らがこのように農薬を削減することが出来る農業を無視し、自分自身に金銭的、肉体的な負担をかけることを良しとする精神構造は、決して肯定させるべきではない。農業の本質である継続する産業を、次世代に間違つて誘導することは明らかに禍根を残すことになることを理解しようとしないう民族は、決して優秀とは程遠い単語をWHO（世界保健機関）当たりから使われることになって当然だろう。それにも増して、その姿を消費者に見せつけ、憐れみを感じさせようなどと考えるのであれば、江戸時代の「生類憐みの令」の御犬様になり、はちみつを塗って、♡と、もだえる変態プレー大好き野郎と同じではないか。えっ、どこか間違っていますか？

食べなくても効果がある？

そしてフィリピンのコーンも日本とは違っていた。2003年にヨトウ虫などの特定害虫に抵抗性を示すBtコーンが栽培され、著しく害虫被害が低減したことは生産者のメリットにもなるし、日本の検査基準あたりの得意技の一つである、より見かけの良い商品を流通させることは多くの消費者の利益にもつながるのだ。

案外知られていないが、食害があるコーンなどはカビ毒が発生して、その毒性は一部の農薬よりも危険で健康被害もあるとの報告書が存在するのだから虫を無視することは危険なことなのである。ちなみに日本はその様な安全・安心なバイオ(GM)・コーンを1500万t（日本国内の米生産量のほぼ2倍）の量をGM**国内栽培非推進派の会社が輸入**しているのだからおかしな話だ。

以前米国・モンサント本社を訪れた時に、ある副社長は「Bt作物は対象害虫が食べなくても効果がある」、つまりBt作物に近づいただけでも虫は嫌がる云々と説明していた。その点をフィリピンのバイオ関係者に聞いてみたが、「そんなに素晴らしい効果はない」との回答を得た。まっ、早い話、モンサントも時にはウソとは言わないがハツタリをカマスこと

もあると言うことなのだろうか。

後戻りはできない

フィリピンではこのバイオ・コーンを栽培するに当たり、大きな反対運動があつたのも事実である。中には全く無駄なハンガーストライキをしたり、プラカードを持って実験農場を襲つたりしたこともあるそう。彼らを「グリーンガイ」（緑の連中）と呼ぶそうである。このグリーンガイはヨーロッパの大本家が資金提供をして、フィリピン国内で扇動したのだから、侮ってはいけない存在なのだろうが、現実にはグリーンガイには冷酷な結果になったそう。一度、生産者がバイオに足を踏み入れたならば、後戻りはできない。

つまり、GMの安全性、生産性の高さ、効率性、作業性すべてにおいて既存の品種を凌駕することになれば、「昔は良かった」などとハンカクサイイことを言うアホーは存在しないと言ふことである。

さーみなさん、使えない旧世界のヨーロッパの香りがするベーターベンの田園ばかり聞いていないで、大阪の新世界、間違い、新大陸米国の感動を与えるドボルザークの名曲、新世界のメロディと共にバイオのニューワールドを経験しましょう。

続く。